
まじっく

かいん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじっく

【Nコード】

N2035Z

【作者名】

かいん

【あらすじ】

元ひっきーの娘が謎の少年と出会う物語。

何でもありな魔法世界と制約だらけの現実世界を行ったり来たりします。

元引きこもり主人公と一緒に電脳世界の創造主を探してください。

序章

序章

010

かつてあなたの作った世界が、当時の私のすべてでした。

それ以前の私は、まるで寝たきり老人のような生活。

コンビニに行くことすらままならず、殆どの時間を自室で何もせず過ごす毎日。

友人はおらず、宅配業者と交わす会話ですら声が震えた。

買物物は親任せ。完全な対人恐怖症。

そんな私が、あるときあなたの世界に触れたのです。

自らを鍛え、自分で稼ぎ、他人と協力して何かを為す作業。

そのすべてをあなたの世界から学びました。

その世界で私は、賢者、偉人とすら呼ばれるようになりました。

そんなとき、あなたの抱えている問題を知りました。

こんなに私を救ってくれたあなたを私が放っておけると思っ？

いえ、ごめんなさい。押し付けがましかったですね。

素直になります。

おそらく私は、単にあなたの助けになりたかったのです。

こんなに私を勇気付けてくれたあなたの世界に、行動で感謝の意を示したかった。

え？ いや、あの、その、つまり……

要するに私は、あなたに恋していたわけです。

狩場

011

街から程近い初級者向けの狩場。

広葉樹がうつそうと茂る森の中にできた小さな広場には、どこどこに切株が残る。そこにうず高く積まれた雑魚モンスターの屍骸の山。まだ知り合って間もない私たち8人が仕留めた今日の成果だ。

バウンティーハンターのドヘルガンとベクティムは屍骸の山を指差し、まだ初心者である私たちに重いペナルティーを課してきた。

「てめえ等が初心者だってことは分かっている。この辺りを俺達の縄張りとは知らなかったんだろ？ 狩り散らかしたことを反省してらってののか？」

ベクティムは十数メートルもある鞭を弄びながら舌なめずりをし続ける。

「だがな、初心者だからって許されていい事とそうじゃない事がある。この場合は後者だ。分るか？ ああ?!」

私自身、ドヘルガンとベクティムの悪評は酒場で散々聞かされていた。のに、奴等の縄張りについては理解できていなかった。未熟な私たちはいつの間にか奴等の狩場に踏み込み、その逆鱗に触れてしまったのだ。

勿論、ゲーム内では何処で誰がどのように狩りをしようが自由だ。私たちは街から最も近いこの狩場で機嫌よく狩りを楽しんでいた。管理部からも何一つ文句の付かない模範的プレイヤー、のはずだった。

ドヘルガンとベクティムが腹を立てているのはあくまで身勝手自分勝手。狩りの独占というよりも、うがった見方をすれば初心者に因縁をふっかけて少ない有り金を巻き上げようとしているように見

える。

今回の狩りに参加したのは私を含めて8名。そのすべてが初心者で、純粋に経験値や通貨ポイントを稼ぐのが目的だった。8名全員が貧弱な防具と武器装備。魔法も殆ど覚えていない。

ルピナ。

世界初のフリースタイルオンラインゲーム。その自由度の高さはそれまでのゲームの比ではなく、翻訳系アプリケーションに優れ、たちまち全世界に大量の熱狂的ファンを生み出した。

それまで引きこもりで友人も生きがいも無かった私はたちまちルピナの世界に魅了され、一日の大部分をこのゲームに費やすようになった。最初は恐る恐るだったゲーム進行にもすぐに慣れ、一緒に狩りをしてくれる者たちに声をかけることも出来るようになっていった。現実社会では近所のコンビニで買い物することさえ恐怖なのに。

ゲーム世界で、私は当たり前前のコミュニケーションに触れ、失っていた何かを取り戻しつつあった。しかし、どんな社会にも悪辣な奴等はいらるものである。

「いつもならな、金置いて行くだけで帰してやってもよかつたんだが、あいにく今日は俺もベクティムも虫の居所が悪くてな」

もともと無事で帰すつもりなど無いな、と私は直感的に思った。

ベクティムは得意の鞭をこれでもかと誇示し、その辺の木の枝や岩を破壊して見せた。

私たち8人は為すすべなく怯えるのみ。全財産投げ出そうが、丸裸になるうが、最早許されるすべは無いかに思われた。

ベクティムは怯えた子犬を見つめるような支配的な視線で、音速の破壊音を周囲に響かせ続けている。奴が今欲しているのは金でも謝罪の言葉でも無い、いたぶり殺す快感だけなのだ。私は心の底で理解した。勝手に膝が笑い始めるのをなんとか抑えつけ、仲間と周囲の様子を伺う。

このゲームの大きな特徴の一つにタッチスキインターフェイスの採用がある。

通常のヘッドセット以外に両手首の触覚センサー、これらすべてを合わせてマルチインターフェイスと呼ばれている。視聴覚インターフェイスが立体的な音声や画像を脳内に構築するのはもうすでに当然として、秀逸なのは触覚である。

人の病態の一つに連関痛というものがある。心臓に疾患があると肩こりなどと勘違いして原発疾患の発見が遅れたりする厄介なものだ。タッチスキインターフェイスはこの皮膚感覚錯誤を逆利用。刺激の強弱と移動速度をコントロールすることでどんなに狭い範囲からでも、つまり両手首のセンサー設置面からだけでも、全身のあらゆる部位の触覚痛覚を殆ど再現できる。触覚痛覚においては約93%。同様の原理で嗅覚味覚もそれぞれ43%、56%がタッチスキインターフェイスのみで再現可能となっている。

ベクティムの鞭がひときわ大きく唸り、私の右隣のシーフが大きく後方へ吹っ飛んだ。瞬間、生暖かい血飛沫が私の右顔面を濡らす。私は震えを抑え、自分が今置かれている状況を脳味噌の一部でなんとか冷静に判断しようと努力した。ベクティムを刺激しないよう細心の注意を払って身構える。

何とか隙を見てやられたシーフを視線の端に捉えると、特大スプーンで抉り取ったような喰いさしの頭蓋がそこにある。抉られた頭蓋くぼみの中央に高さ10センチほどの鮮血の噴水。途端に私は見ってしまったこと自体を後悔し、自らの好奇心を恨んだ。喉の奥から酸っぱい物がこみ上げてくる。

タッチスキインターフェイスの欠点はその長所と表裏一体。苦痛に伴う恐怖まであまりに忠実に表現されてしまうため、死に行く者にとってそれは既にヴァーチャルを超えている。耐性の無いものが高感度センサーを身に付けると受けた苦痛がトラウマとなって残ったり、時には死亡してしまうこともある。よって日本国内で市販されているマルチインターフェイスは厚労省によってリミッターが

かけられている。しかし、このリミッターをそのままにしてゲームを続けている上級者は殆どいない。センサーの反応速度と反応性は魔法や武器の使用精度に直結するため、皆独自にリミッターを外し、もしくは感度を上げ、またはそういった改造が為された外国製品を自ら並行輸入し、ゲーム内で使用している。感度向上によってレベルアップは格段に加速されるが、その分被害を受けたときのショックはプレイヤーを直撃し、心臓や精神に負担をかける。

「ミニカ、左後方に小路がある。合図したら一緒に走るぞ」

やられたシーフとは反対側、私の左隣にいた斧使いが小声で私の名を呼び、逃走を誘う。周囲はうっそうと茂る広葉樹林。左後方には斧使いがたつた今指示した小路が行く先不明のジェットコースターのように口を開けて待っている。

引きこもりだった私がこのゲームを始めてまだ一ヶ月。現実社会で手に入れられなかったものを私はこの世界で沢山手に入れた。知識、社会性、お金、そして友情もその一つ。すべてが初めての体験。あまりの嬉しさに私の感動は行き場を失い、ゲームの開発者にラブコールのファンメールを送ったりもした。しかし、得られるものの総量に比例して凄まじいまでの心的負担をプレイヤーに求めるのもこのゲームの特徴だ。私たち8人が、今はもう7人だが、陥っているこの状況がまさにそれである。

「今だ！」

叫ぶ斧使い。この声に十分速く反応できなかつたことが幸いし、私は生き残った。

駆け出す斧使いの体を後方から這い上がるべくタイムの鞭が上中下に3分割する。まだ3歩しか走っていない斧使いの体が鞭と駆け出す勢いの相乗効果で前方空中へふわりと投げ出される。明らかに斧使いの読み違い。舞う斧使いの首と胴。息絶えた彼の目に浮かぶ意外そうな表情。見る間に血の気が引いていく。噴出す血液は肉片の落ちた場所よりさらに数歩分前方へ撒かれ飛ぶ。駆け出そうとした私は一拍遅れて斧使いの惨状を目撃し、膝の力が抜けてそのま

まその場にへたり込んだ。

腰が抜けた私の頭上を水平に泳ぐベクティムの鞭。そのときまだ立っていた者達が一斉になぎ払われる。肉片と血の乱舞。すぐそこに見えている小路が、海上の不知火か砂漠の蜃気楼のように儚く朧に揺らぐ。

今日ここで死んだ奴等は改造インターフェイスを着けていたのだろうか？ だとしたら相当に危ない。奴等の精神と体力が頑健で、ヴァーチャル死の負荷に耐え、無事復活できることを祈るしかない。気が付くと生き残っているのは女性二人のみ。私と私の横にいる未熟な魔女だけとなっていた。

付いた血液を一振りで払って鞭を巻き取るベクティム。ドヘルガンに至っては最初から得意の片手剣を取り出してすらいなかった。

「おっと、動くなよ。俺達は賞金稼ぎだ。他人の縄張り荒らした罪人が賞金首になる前に処刑したつてだけの話だ。なあ、分るだろ？ そういう意味じゃあ恨みっこ無しってこった。ククク、それに何も殺すのだけが目的じゃねえんだしよ」

「ゆ、許してくれるの？」

未熟な魔女が叫んだ。怯えきつた目に震える体。通常のインターフェイスでもトラウマが残ってしまいそうな繊細なキャラ。

「だからお前等2人だけは殺さずに残してやったんだろうが。俺達の慈悲に感謝しな」

一瞬、希望に輝く未熟な魔女の瞳。が、それをあざ笑うかのようドヘルガンの含み笑いが周囲に広がる。

「くつくつく……いい加減にしてやれベクティム。これから起こることに何の予定変更も無いんだ。お嬢さん2人に余計な望みを持たせるんじゃない」

ドヘルガンの一言が私たち2人の希望をあっけなく打ち砕く。

「余計なこと言ってるのはためえだろドヘルガン。持ち上げてから落とす。このロマンが分んねえのかね？ フン、まあいい……」

それを聞いた未熟な魔女と私は安堵の表情のまま凍りつく。

「お前等2人とも武装解除してその場で素っ裸になりな」

ベクティムは素に戻り、私たち2人に無慈悲な要求を突きつける。すでに鞭を仕舞ったからといって、今の私たちでは2人がかりでもベクティムを倒すことは出来ないだろう。さらにその後ろにはドヘルガンが控えている。

「さっさとしねえと両手足切り落として言うことを聞かすことになるぞ、ああん？」

未熟な魔女は、私の方を伺う余裕も無いほどに追い込まれている。私たち2人はこのままこの獣どもに弄ばれて終わりなのか？ さらに身包み剥がれて遂には殺されるのか？ 他の6人の仲間のように

……

私は懐の煙玉を探った。今日はまだ一発も使っていない。まだたつぷりとストックがある。こいつを使って逃げ延びることが出来るだろうか？

とんでもないクズ野郎だがベクティムの鞭の腕は本物だ。煙で目くらまししたからといって、あの十数メートルの射程域から逃られるのか？ 逃げおおせるには何かとてつもない幸運が重ならなければ無理だ。

「動くなよ。じっとしてりゃあ痛くはねえんだからよ……」

ベクティムのどろりと濁った目が私たち2人を舐めまわしながら、一歩、また一歩と近づいてくる。

差し出された薄汚い手。凍り付いて焼け焦げて、蛆に喰われて腐れ落ちろ！！ 私は心の中でありつたけの呪いを浴びせかけた。魔法ですらない呪いの言葉にはもちろん何の効力も無い。私は今度は自分自身の低レベルと無力をも呪った。

「うががががああああ…… うぎ、ぎぎ、ぐぐ……」

突然叫びだすベクティム。慄然とするドヘルガン。

「うがくそうつ、お前等何しやがった、く、く痛、つつ……」

ベクティムの腕を侵しているのは大魔法『マニテュオバクール（魔の過冷却）』の冷気だ。未熟な私が見るのは今回でまだやっと2

度目。この大魔法を唱えられるものがここには誰も居ない、にも関わらず、魔法は突如降ってわいたようにベクティムの腕を侵し始めた。

私はこの好機を逃さず、煙玉を一つ炸裂させると未熟な魔女の前腕を引っつかんで先程の小路の方へ駆け出していた。

5歩… 10歩… まだ鞭の唸りは聞こえない。

私は続けて2個3個と煙玉を炸裂させつつ、前傾姿勢で駆け足を早める。今掴んでいる腕にちゃんと魔女の全身がくっついて来ている事を祈りながら。さらに4個5個と後方にばら撒く。

血溜まりを飛び越え、林を抜けて草原に出る。後方を振り返るのが怖い。スピードは落とさず、未熟な魔女の体勢を整えつつ2人でさらに走る走る。

先程居た森が遙か彼方に見える。小高い丘の上に達したとき、私たち2人は草むらに突っ伏して倒れた。息切れが収まらない。

逃げ出す過程で私は、仲間と協力することの大事さと互いに足手まといになるリスクについて嫌というほど思い知った。おそらく隣で息切れしている魔女も同じだろう。協力するときはし、必要ならば個別に動く。命を失わずしてこの大事な教訓に気付けてよかった。マルチインターフェイスは草原で仰向けに転がる私に風のそよぎと生き残った感動を伝えてくれている。

ドヘルガンとベクティムの賞金稼ぎ2人はもう追って来ない。

殺された仲間達のうち何人が高感度インターフェイスを使っていたのだろうか。彼等の後遺症などが残らないことを祈るしかない。

ベクティムの腕を止めたのは一体誰だろう。それともあれは魔法ではなく、ベクティム自身の持つ病だったのだろうか？

いやしかし、肉体が内側から凍りつく病など考えられない。答えの出ない問題を棚上げし、私は空を見上げた。

隣では未熟な魔女が死んだように眠っている。そういう私も魔女であり魔法使いなのだが、まだまだ職業を名乗れるようなものではないと今日の一件で思い知ってしまった。

それから数年の月日が流れた。

三二カ

1 + 1

アロウの街から数十キロ。

タスクを達成するために訪れた密林の奥地で私は予定外の地下空間に迷い込んだ。

タスク自体は軽いものだった。私のレベルなら難なくこなせる程度。

それにしてもどこだここは？

完璧なはずの私のマップにもいまだ載っていないダンジョンか、それとも次元のひずみか。

大剣ワルギスを振り回せばゴブリンやオークをひと薙ぎ。唱える呪文は最上級ばかりで並み居る魔法使い達も皆揃って恐れおののく。

この世界での私を一言でいうなら『無敵』。

これでほぼ間違いない。

その私が自分のいる場所すら把握できないというのはいったいどういふことなんだ？

つい先ほどもらったタスクを軽くこなし、帰ろうと振り向いたら急に足元が崩れた。気がついたら真つ暗闇で、どうやら目の前には人が倒れているらしい。先ほどからピクリとも動かないし、他に気配を感じることも無い。暗闇でかつ静寂だ。とりあえず魔法で周囲を照らすことにする。

「ルミナスッ！」

明かりの呪文によって周囲は一瞬でまばゆい光に包まれた。

少し光が安定してくると、マントに包まれた魔法使いとも僧侶ともつかぬ男が一人、すぐ目の前に横たわっているのが見えた。周囲

は思ったより広い。ただの地下空洞というわけでもないらしい。

壁には一定のパターンで模様が見えるが、人為的なものかどうかわ判別がつきがたいほど表面が荒れている。ただの地層なのかも知れない。それにしても綺麗に空洞が開いたものだ。ちょうど人の身長プラスアルファくらいの高さで縦横もほぼ長方形。人為的なもので無いとしたら驚くべき自然の悪戯だな。

「おい、起きろ」

私はつま先で倒れている男を突いてみた。この世界ではこういう罨がよくある。

いつでも反撃できる態勢を取りつつ男を起こそうとしてみる。

3回ほどつつくと男は呻いて身を起こした。

見た目は20歳前後。年齢にそぐわぬ高価そうな宝飾に年季の入った魔法道具。その上から埃にまみれた黄緑色のシルクのマントと、うちぐはぐなスタイル。

私は男の格好をあらためて見て思わず吹き出した。何者か知らないが、悪辣な連中の一味では無さそうだ。

「それなんて格好？ そのマント、ひよつとして元はパーティー用？」

「ん、うう、オリジナル……かな。ああよかった、生きてる……」

「私はミニカ。この世界で最高ランクを極めた何でも屋の大魔法使いよ。あなたは？」

「僕はトニー。なんて言えばいいのかな、ええと、修行中の魔導士だ」

トニーは埃を払いながら立ち上がった。なんと彼の背は私より3インチ以上も高い。女魔法使いの中ではかなり大柄な私が、立ち上がった彼を完全に下から見上げる形になった。

「良かった。間に合ったか」

トニーは溜息をつくように言った。

その直後、頭上で凄まじい爆音が響き渡った。

壁の表面は崩れ、砂埃が舞う。私たち2人はその場でよろめいた。

「どづいづこと？ こ、これ……きゃあ……」

トニーは、戸惑いよるめく私の両肩を支えるようにしっかりと抱いた。まるでこの爆音を予想していたかのようだ。

「私がついさつきタスクをこなしたときには何の前触れも無かったわ。あなた何か知ってるの？ この世界は……」

私はトニーに事情を聞こうとしたが、ますます大きくなる地鳴りと轟音の中、声がなかなか通らない。自分が把握していないダンジョン内で、素性のよく分らない相手に必死で状況説明を求める偉大なる魔法使い。それだけでもう十分滑稽だ。だが分らないものは仕方が無い。

私は揺れる地面に両足を内股に踏ん張り、トニーの胸に顔を埋めて少々ヒステリックに情けない問いかけを繰り返した。

「バカ、もう、ホントに怖いんだから！ 早く説明しなさいよ。わわ、キヤー」

彼はそんな私の背中に手を回し、抱き寄せたまま後ろ頭をかきあげるようにそつと撫でる。

「もうそろそろ終わると思うよ。危ないところだったね」

彼の声はあくまで落ち着いていて、優しい。

私は彼の胸に埋めて顔色が見えないのをいいことに、大いに赤面した。最強の魔法使いなのにあんな軽い悲鳴を上げちゃった。バカバカ私のバカ。大魔法使いの威厳が台無しだよ。もうやだ。やだやだ。

まもなく爆音は聞こえなくなり、地鳴りや轟音も静まった。

私が最初にかけてた明かり魔法はまだ薄っすらと周囲を照らしている。

トニーは私を抱きしめたまま細面色白の顔をこちらに向けて軽く微笑んだ。包み込むような笑顔だ。

「バ、バババ、バカね。ちよつと足場が悪かったから掴まっただけ……」

私は押し退けるように彼から離れた。なんだこのツンデレキャラ、

私らしくねえ。明らかに最高位魔法使いの貫禄にそぐわない。これまで積み上げてきたものがあ……

「トニー、お願いがあるんだけど。さっきの悲鳴、聞かなかったことにしてくれない？」

私は上目がちに懇願する。もう貫禄なんて何処へやら。

「いいよ」

トニーは子犬をあやすような笑顔で答える。

それにしてもこの男、あれほどの大爆発でも落ち着きはらったこの態度。この私ですらこんな大異変これまでに遭遇したこと無いのに。

地上に出ると背筋がうすら寒くなるような焼け野原が辺り一面に広がっていた。これじゃあ無敵の魔法使いでもひとたまりも無い。もしあの時この場にいたら間違いなく即死だ。

変なファッションの優男は、期せずして私の命の大恩人となった。「見たことも無い殲滅型の魔法ね。どちらかというと天災に近いわ。個人やグループで生み出せるマジックパワーとは桁が5〜6個違う規模。トニー、どういうものなのか説明できる？」

「ああ……ん、知らないよ良くは」

トニーは私と目を合わさずに答えた。

「ただ、とある筋から今夜大規模なPKがこのあたりで行われるって知ったんだ。でも僕最近この世界に来たばかりでさ、勝手がよく分らなくて。しかも、時間も無くてかなり焦っててね。そんなわけで格好もこんなで……」

トニーは取りとめの無い返答をした。

「それよりも助かって良かったじゃん。ね、ミニカ、街に連れて行ってくれるかい？今はアロウの街のトリッシュの酒場がメインのタスク配布ポイントになってるんだろ？」

「来たばかりなのに詳しいのね。予習でもしてきたの？」

私は、アロウ周辺では傍若無人冷徹残酷な魔法使いで通っている。

その風評を気にしたことは無いし、誇りにすら思ってきた。でも、このトニーにだけはそんなあるがままの私を知られることに少し抵抗を感じる。初めてだ、こんなことで胸がドキドキするなんて。

「わ、私は一匹狼の魔法使いだから紹介できるような仲間なんか殆どいないけどね。まあいいや、疲れたしもう戻ろうと思ってたところ。一緒に行く?」

「うん、頼む」

「ああ、それと……」

「え?」

「さつきは命拾い、ありがとうございました」

落ち着いた私は少しおどけた調子で御礼を述べた。

周囲は夕闇に包まれ足元もおぼつかないが、凄まじい魔法力で焼き払われた周囲にウエアウルフー一体スライム一匹いないことは明らかだった。

普段なら警戒しながら慎重に進むべき夜の道を私たち2人は時には冗談を言いつつ話しながらのんびり帰った。

まもなく私達はアロウの街の大きな外門にたどり着いた。

外門には荒野から来る人外が近づけないように多種多様なまじないがびつしりと巻きついている。ざっと30種くらいはあるうか。このうちの5、6個はギルドからの依頼で私自身がかけたものだ。痛んではいるが、まだきちんと機能している。

外門から少し歩くと小さな内門があり、そこから程近いところにギルドの集会所にもなっているトリッシュの酒場がある。

扉を開けると酒と煙草と硝煙の臭いがスモークでも焚いたかように溢れかえってきた。

「ミニカ、おめえ無事だったんだな。心配したぜ」

野太い声が店の奥から響き渡る。酒場のマスターで情報屋でもあるガウが髭面を掻きながら声をかけてくれた。

ガウは巨人族とも見まごうばかりの大男。

一匹狼の私だが、このガウにだけは少し心を許している。一見粗雑に見えるが実は細かなところに気がつく人の良いオヤジだ。

「ああ、危なかったがね。このトニーがいなけりゃ灰も残っちゃいなかったかもな」

私は厳しく声のトーンを落として、横にいるトニーの肩をポンと叩いた。

「ずいぶん大柄だが職種はなんだ？ よけりゃあうちのギルドに入んねえか？」

私への心配は一瞬で終わり、いきなりトニーの勧誘を始めやがった。ちゃっかりしたオヤジだ。ガウは私のことをトニーにどういう風に話すつもりだろう。別にどうでもいいんだが、なぜか気になつて仕方が無い。

「ガウ、か……」

トニーの目からは先ほどまでの微笑が消え、心中探るような鋭い視線がガウに浴びせられた。

「はあ？ なんだお前さん。俺とは初対面じゃなかったか？」

ガウはトニーの変化に少し戸惑っているようだ。

「いや、何でも……」

トニーはガウから目を逸らし、下唇を噛むような仕草をする。彼はそれきり言葉を切り、値踏みするような視線で店内を見回し始めた。ギルドに登録したりタスクを貰ったりする様子も無い。

「おいミニカ、ちよつと来い」

ガウが私の手を掴んでカウンターの奥に引つ張り込んだ。

「いててて、呼べば行くよ。引つ張るなよ」

いくら女魔法使いの中では大柄でも、私の腕はガウの数分の1ほどの太さしかない。いつも思うがこのオヤジ、ギガントの血でも入ってるんじゃないのか？

「俺は見覚えねえぞこの兄ちゃん。いつてえ何者だ？」

「知らないよ。私も今日初めて会ったんだ。おかげで命拾いしたんだが」

「おうよ。心配してたんだ。超ど級の爆発だった。オレがお前に渡したタスクとちょうど同じ方角同じ頃合いだったしな。お前が店のドアを開けて顔見せるまでは、ずっと冷や冷やしてたんだぜ。んでクリアはしたのか？」

「タスク自体は楽勝だったよ。つか私のレベルでクリアできないタスクにもう長いことあたつてない。それにしてもあの爆発は凄過ぎだ。トニーのいた地下空間がシエルターの役割を果たして命拾いしたが…… 地上にはもう何にも無くなって、そりゃ綺麗なもんだつたよ」

私は疲れた顔で微笑んだ。

ガウは少し私に調子を合わせたが、すぐ真顔になり、トニーの話に戻った。

「あいつちよつとおかしくねえか？ ノンプレイヤーキャラじゃねーよな？」

「まさか。普通に会話してたんだよ」

「ならいいが。最近は色んなパターンがあるからな」

「ミニカ、ガウ…… ちよつといいかい？」

いつの間にかトニーがこちらに向いて声をかけている。

「用事が出来たんで今日はもう落ちるよ。今度いつまた来れるか分からないけど、寄れたらここにも寄るね」

そういう間にもトニーの影が薄くなってきた。

「ああいいよ。いつでも来な」

ガウは事務的にトニーを見送った。

「待つてトニー、私は……」

急いで声をかけたがトニーの体はもう向こう側が透けて見えている。声も途切れ途切れにしか聞こえない。

「また…… ニカ。また今度ゆつ……話……う。僕……」

トニーはフェードアウトした。

リアルタイムはもう午前3時を回っている。周囲を見回すと酒場からは急速に人影が減っていた。

「まあまたこいやミニカ。次回以降はタスクも重めだ。時間かかるぞ。集中して来られるのはいつごろだ？」

「気付けばガウも少し眠そうだ。」

「来週再来週は休みも多いし、主な用事は午前中に集中させるから大体いつでも」

「分った。俺ももう落ちる。キッドに代わるぞ」

そう言つとガウの影が薄くなり、代わりに緑色の衣装をまとつたかわいい子供の画像が現れた。

キッドは自動でタスクの割り当て、経験値管理、クリアタスク管理、アイテム保管、イベント運営などを行つてくれる総合窓口。ガウが酒場の情報屋としてカウンターに立てないときに代わりを務めてくれるノンプレイヤーキャラだ。

「最近はそのまま寝こけること多かつたからな。今日はちゃんと帰ろう」

私は独り言を言いつつ人影まばらになつた店内に別れを告げた。

数時間前にあつた爆発はもう遙か昔の出来事のように淡い意識に包まれつつあつた。

早朝参加の連中がポツリポツリと店内に姿を現す。

粗野な声が店内に飛び交い、キッドがそつなく彼等にタスクを配つてゆく。

世界は回り続けていた。

リアル

1 + 2

けたたましく響くベルで明け方の夢は悪夢に変わる。

ガンガンと割れそうな頭をかかえ、止めた目覚ましの文字盤を覗き込んだ。

「げ、今止めたんじゃないの？ この目覚まし、何で30分以上もタイムラグがあるのよ？」

7時半に仕掛けたはずの目覚ましはもう既に8時を回っている。

止めた状態で意識を失い、その姿勢のまま30分の時が流れたようだった。

いや、もう何度目だこの現象！

明け方4時にログアウト。そこからウイルスチェックとデフラグを初めていつの間にか意識を失った。ベッドに潜り込んだときの記憶は綺麗さっぱり消失している。

最終的に寝たのは何時だ？ 自問自答しながら歯磨きと洗顔と朝食と着替えを同時にこなす離れ業。このトーストなんか味がスースーするよ。

「あ、パソコン落としていかなきゃ……」

つい先月、勝手にファイル交換ソフトをインストールしてばら撒くというとんでもないウイルスに見舞われて、パソコンがぶっ壊れたとこなんだ。

まあクレジットカードはなんとか無事だったし、ただの愉快犯だったみたいだけど、安月給でそうそう突発的な出費があつては生命の危機。

それにしてもウイルスダスター役に立たねえ、訴えるよっ！
テレビを点けるとこれまたハッカーの報道。

困った奴等だけど人が死ぬわけでもないし、ゲームのチート探したりするのにも一役買ってる人たちだから、徹底的に恨む気にもなれない。

頼むからほどほどにやってくれ。

私の名前は、あさくら みにか浅倉小娘。

変な名前だろ？

親が遊びで付けたとしか思えん。70歳になっても80歳になっても小娘ミカだぜ？ ふり仮名ないと誰も読めないし。

読み辛い名づけするのが流行ったのかな？

ただいま18歳で今月から一人暮らし。

身長低し。顔は美人……じゃないけど不美人でもないと思いたい。だれかそういつてくれ。念のためたのむ。

正直、中学までの私は最悪だった。病弱でチビ。友達いない、話下手、根暗の五重苦。

その所為で中学高校の半分は引きこもり。なんとか卒業できたのが不思議なくらいなんだ。実は今でも人前じゃあダメダメ。あがって声が震えちゃう。

しかしまあそのおかげと言っちゃああなたが、ネットゲキヤラのレベルは上がりまくり。

余計なお金は一銭も使わず、一からその世界最強レベルまで引き上げたのは実は私一人くらいしかいないんじゃないかな？

おかげで大量にタスクをこなして、ゲーム内では大金持。

あと、ホントはやっちゃいけなかったんだけど、リアルマネートレードって知ってる？

ゲーム内のアイテムや召喚獣を現実のお金で売り買いするの。

なんせその世界最強レベルだから最後の方は面白いようにレアアイテムが手に入ってるさ。

ここだけの話、1年で150万円くらい儲けたんだわ。

だって元はタダだよ。たしかに死ぬほど時間を費やしてはいるけ

ど。

引き受けるタスクは後になるほど難易度上がるから、殆ど私のキヤラじゃなきゃクリアできないようなのばっかだったな。

それで、貯めたお金でさ、一念発起したわけ。このままじゃ駄目でしょ、一人暮らしでしょやっぱ、って。親はびっくりしてたけど、貯めたお金のことは言わないで、ちよっぴりだけ援助してもらって、ワンルームマンションに引っ越したわけ。

自分でもびっくりだよ。

でも、たとえネトゲでも、引きこもりの高校生が一人で150万も貯めたのはなんか自信に繋がったんだと思う。

だから一人でもやっていけるって、なんとか踏み出せたんだ。

これからの目標は、ゲーム内で得た自信を足がかりにリアルでも自信を持つこと。最初にこのゲームを作ってくれた人には今でもホント感謝している。

リアルの私の仕事は派遣社員。

ソフトウェア開発している社員の依頼でコピーを取ったり資料を整理したりする人にお茶を入れたりする仕事。

え？ 良く分らない？

要するに雑用係のそのまた下ってこと。

月給は10万ちょい。

だから今でも夜間は大魔法使いとして稼ぎまくらなきゃいけないし、そのせいで毎朝目覚ましの前で行き倒れの旅人みたいな姿勢になってるわけ。

派遣の仕事はまだやり始めたばかりだし、今からリアルでもレベル上げしなきゃ。

「おはようございます」

突然背後から元気の良い声。

「お、おはよう……」

リアル社会での私の声はなんて小さくて元気が無いんだ。
ゆっくり振り返ると後輩の椎野君が立っていた。

後輩といっても、私は3月下旬採用、彼は4月上旬採用で10日
余りしか違わないんだけどね。でも先に入って一通り仕事の手順を
教わっていた私はそのまま彼の教育係になったのでした。なんせ仕
事は簡単。数十人いる社員さんのそのまたアシスタントさんのその
下で細々と雑用を聞いてればいいんだから。こんなので先輩気分を
味わえるなんてちょっとお得。引きこもりのおちこぼれがなんと
なく偉くなったもんだわ、ふっふっふ。

椎野君はチビの私なんかより遙かに背が高く、スラリとした細面
で頭がちっちゃい。私にとって彼はトテーモ気になる存在。でも私
自身、まだ自分の思いには自信が無い。

中高の大部分を引きこもりとして過ごした私は、長い間恋人どこ
るか普段会話を交わす異性さえもいなかった。当時の私は極度の対
人恐怖症。

宅配業者や近所のご老人と話すのでさえドキドキして声が震えた。
当時より幾分マシになったとはいえ、今でも他人と話するとき私の心
臓はしばしば駆け足になる。悔しいけどその所為で、私は私のドキ
ドキが恋愛感情によるものなのかそうでないのか分からない。私だ
って女の子なんだ。人並みに恋愛感情だってあるんだ、って信じた
い。

「あのお、椎野さん。午前中はA列B列のならばに付いてもらって
いいですか？」

あゝ、指示するだけなのに声が震えるう。そういえば同年代の男
の子と直接話したのは中学校のグループワーク以来のような……

「はい。分りました。A・Bですな」

良く通る椎野君の声。圧倒されちゃう。

仕事に入ってしまったえば、あとは担当先の指示に従ってただ黙々と
雑用をこなすのみ。

昼は気弱な派遣社員。夜は天地を揺るがす大魔法使い。あゝ、早く帰りたい。

「君新しい子？　こういう記事わかる？」

休憩中の社員さんから突然話しかけられた。最初は誰に声をかけてるのかよく分らなかったが、新しい子って私と椎野君しかないし。

「はい？　いえ、あの良くは……」

なぐんで返事するだけで声が震えるんだ。まったくもう私の意気地なし。

記事は今朝テレビで見たハツカーのものだった。

「俺達の仕事ってどんなかわかる？　あんま詳しくは言えないんだけどさ」

上手く返事できないが、社員さんの聞きたいことはなんとなく分った。

「俺達の仕事ってこいつらと戦うことなんだよね。もしくは有効な予防線を張ること」

おお！　ひょっとして私今すごいことを教えてもらおうとしているんじゃないかしら。

「宇賀さん達のお仕事が、ハツカーと戦うこと、ですか？」

私は慌てて目の前の男性のネームプレートをチラ見し、会話に生かした。

宇賀さんは少しやせ型でメガネにボサボサ頭の、30歳前後の男性。見た感じ典型的なシステムエンジニアだ。

「あ、ああ……」

男性は自分のネームプレートを見て納得し、苦笑いした。

「ええと君は、浅倉さんか。そうだよ。俺達は全世界の天才たちと戦ってるのさ」

「天才って、ハツカー？」

「俺達のチームは総勢50人、君たちも入れてね。一般的で汎用性

が高い、改変が容易で、解除されにくいプロテクトを開発してるのさ」

「物凄く重くなりそうですね」

素人の私が聞いても難題に聞こえる。

「俺達の仕事は理論図とフローチャートを作ってテストプログラムを走らせること。残りは解除手法を開発するチーム。いたちごっこをチームの中でやってるわけだ」

「どのくらいで出来るんですか？」

「いま、有効だと思える方法が15種ほど挙がっている。いまから一ヶ月で50種まで増やし、それをまた25種ほどにまで絞り込む。そのうちの3〜5種を組み合わせ一つのプログラムに組み込む。組み込み方はランダムだし、ダミーも混ぜる」

「それでももうハッカーを防げるんですか？」

「いや、無理だろうね。時間は稼げるかもしれないが」

「破られたらどうするんですか？」

「また作るよ。人間が作るものだからね、絶対は無い。相手はプログラムジャンキーみたいな連中だし、俺達が作ったデータを遡って解析してくるよ」

「大変なお仕事なんですね」

めったに聞けない仕事の内側を教えて貰い、私は興奮した。

「時間稼ぎだね。これで仕事になってお金もらえるわけだし。絶対完璧なプロテクトなんかが開発されたら逆に俺達が干されちゃうよ」

宇賀さんは軽く笑ってコーヒークップを置き、手を上げて自分の席に戻っていった。

「あ、そうそう」

席に着く手前で宇賀さんは私の方に向けて思い出したようにいった。

「ある有名なネットゲーム上で妙なアクセントがあったんだ。友人に開発者がいるんで問い合わせてみたんだけど良く分らないって言うんだよね。天変地異か核爆発みたいな現象なんだけど、そんな

イベントの設定は無いって言うんだ」

「天変地異か核爆発……？」

私はドキツとした。

「もちろんゲーム内での話だよ。俺はそのときたまたまログインしてたんだけど。みんなが集まる酒場で、そのときはじめて見かけたキャラの名前が……」

心臓が口から飛び出てきそうだった。

「トニーって言うらしいんだけど」

え……？

「それ、いま売り出し中のハッカーと同じ名前なんだよね」

マジですか？ 心臓を啜えたまま背筋に氷を当てられた、そんな気持ち。

「まあ、でもありがちな名前だし、関係あるかどうかは分んないけどね」

「そ、そうですね。カタカナ3文字なんて、被りまくりでしょーし」

「そう思ってアクセスログを確認してもらったんだよ。ほら俺、開発者で管理アクセス権のある友人いるから」

またまた背筋に冷たいものが……

「あの事件の時点でログインしてたのが16万人弱。そのうちトニー名でログインしてたのは8名。そのときの足跡リストで前後1時間以内に酒場にいたトニーは……」

言われる前からもう答えが分ったような気がした。

「ゼロだった」

「酒場にいたトニーは0人だったんですか？」

「その通り。まあでもあのゲームはニックネーム登録も出来るし、ニックネームいつでも変更可能だから。富田さんとかそういう名で登録してて、ニックネーム表示がトニーだっただけかも知れないけどね」

「あ、そう、そうですね。毎回ニックネーム変える人とかもたま

にいるみたいだし、ややこしいっいたらありやしない」

そう言いながらも冷や汗が止まらない私。もうやめて」

「え？　なんか浅倉さん詳しいみたいだけどそのゲームやったことあるの？　まあとにかくハッカーのトニーと同一人物かどうかは分らないけど、ニツクネームよく変える奴はPKの可能性が高かったりするし、もしやってるなら近づかない方がいいかもな」

やってるものにもこのゲームに関しちゃプロ級、最上級魔法使いだよ。年収150万で本業より儲けてるよ。その辺のPKプレイヤーなんかチヨチヨいのちよいでボッコボコだよ（笑）しかし、なんか引かれそうで素直にカミングアウトできないのが辛い。もと引きこもりの悲しい性か……

「ところで変わった名前だけど、浅倉さんって下はなんて読むの？」

「あ、ハイ、あの、ミニカです。浅倉あさくら小娘みにか……」

「へ、じゃあ今度からスカートはミニはいてきてよ」

宇賀さんは少し考え込む素振りを見せた後、ニヤニヤしながらそう言って自分の席に戻っていった。

まだ若いくせに典型的オヤジのノリ。そんなんじゃあもてないよ。それにしても、あゝ疲れた。

まさか会社でネットゲの話が出るとは。しかも昨日の今日じゃん。あの超有名ネットゲームの管理アクセス権持つてる友人が身近にいるなんて、さすが業界人は違うなあ。

ふと時計を見るともう終業時間近くになっていた。

椎野君もそろそろ後片付けに入っている。

さっきまで無駄話ばかりしてた私。そんなふうにはさぼってばかりいる先輩の背中をマジマジと見られてたんじゃないだろうか。

う、早くも先輩の威厳喪失？

「浅倉さん、もうあがるよね？　タイムカード押しとこうか？」

「え？　ああ、ありがと」

ん、たぶん大丈夫。なんか彼十分優しい。

会話の中身は聞こえてなかった？ 上手く今風の若者に見えたのかしら？

でも実際話すと声震えちゃうんだよねー うーんちくしょー
さっきまで心臓が出たり入ったりしてた所為か今日はなんかいつもよりハイテンション。この調子で夜の部もバリバリ稼ぎまくりますか。

タイムカードのお礼を言って帰ろうとするとなぜか後ろから追いかけてくる足音。

おいまさか、社員さんじゃないよな。社員さんは定時帰宅なんか一人もいないんだからこの会社。それどころかマイパソコンと寝具一式持ち込んで寝泊りしてるような人もいるくらい。噂じゃあ殆ど帰らないんで自宅のアパート引き払っちゃったとか引き払ってないとか、もう都市伝説レベル。……てことは、おい、まさか。

「浅倉さん、一緒に帰っていい？」

椎野君だあ、嬉しいはずなのになぜか嬉しくないこのお誘い。人前赤面恐怖症な私。

同じ会社で同期で、帰る時間も同じならそりゃ声くらいかけるわな。しかし元ヒキコモリのこの地味娘に同年代とのまともな会話が出来るのでしょうか……

ああ私ったらなんてネガティブな…… まだおじさんの方がマシだあ。

恥ずかしいよう。何話せばいいの？

「さっき宇賀さんと話してたのちよつと聞いてちゃったんだ。浅倉さんてネットゲームやるんだね」

キター！

「う、うん、ちよつとね」

「へー、見かけによらないなあ。もつと読書とか音楽鑑賞なんかに興味なのかと思ってた。実は僕もやるんだよネットゲ。浅倉さんは何に嵌ってるの？」

キタキタキタキター ここではぐらかすのはあまりに不自然。

「んー、いろいろやるけど。一番は『リーマス』かな……」
言っちゃったー

「あー、あれ、今一番熱い奴だよ。僕もやってる。実はつい最近はじめただけど、浅倉さんはもう固定パーティーとかいる？」

「ん？ うん…… まあね。いつも同じ人たちと回る……かな。それに潜ってる時間もそんなに長くないから、椎野君とはニアミスしてないかもね」

「バツキヤロー！ いつも一人の一匹狼だよ。それでもここ何ヶ月も負け知らずだよ！ パソコン開けてる間中ずっとゲーム漬けの傍若無人冷徹残酷大魔法使い様だよ！」

「しかも うわヤベー ハンドルネーム100%広まってるよ。ハンネ言ったら絶対ばれちゃう。色々とムチャやりすぎたからな」

「こんな日がくるならネット上でももうちょっとおしとやかにしてくんだった。」

「でもそれじゃあ稼げないし。私今、頭の回転物凄く速くなってる気がする！」

「んー じゃあハンドルネーム聞いても分らないかな…… ところで浅倉さんの下の名前って珍しい字面だけど、なんて読むの？」

「し、し、しまつたー こんな日が来るなんて思いもよらなかつたから下の名前ハンネそのまんまだよー でも本名教えないうって無理だろ、職場の人間関係上。」

「さつきも宇賀さんに聞かれたんだよね。笑わないでよ。ミニカ……。浅倉あさく小娘ひみにかって読むのよ」

「言った、遂に言った。もう駄目だ。絶対ばれてる。下品で暴虐な大魔法使いの正体がいま解き明かされてしまった。」

「椎野君は何かに気付いた様子で下を向いてぶぷつと小さく噴出した。必死に笑いを堪えているように見える。」

「おい、おいら、せめてリアクションはこっちに見せてくれ。反則だ。いや、ごめん。なんかこの前アクセスしたときに似た名前の人が

居たような気がしたんで……」

ハイ、それ間違いない私。トリツシユの酒場でもアロウの街でもミニカは私一人しかおりません、ハイ。

ただ『リーマス』の世界は広いから、椎野君がアロウ以外のまったく別のエリアに毎回アクセスしてるなら他にもミニカサンいるかも知れませんが。いまんと同名にはまだ会ったことございません。私の名前が他のエリアにも轟いてる可能性なら十分ありますが。

「僕いま、アロウの街から入ってるんだ」

ほらね。その周囲でミニカは私だけ。ハア」

「このまえすごいアクシデントイベントが発生して、そのときたまいたんだけど」

「それ宇賀さんの話でも出たけど、昨日のことじゃない？」
咄嗟に聞いてしまった。

「よく知ってるね。浅倉さんやっぱりあの場にいたんだ？」

あゝ、やぶ蛇。

そのとき椎野君の名札がチラと目に入った。退社時に外し忘れたらしい。

「椎野君の下の名前もけっこう珍しくない？ 始めて見る字面だけど……」

後で思い返すと、ここらが運命の分岐点だったのかもしれない。

「うん。自分でもそう思う。全国探しても殆どいないんじゃないかな。大きい兄って書くの。椎野大兄って書いて、『しいのトニー』って読むんだ」

さっきまでとは違う角度で、私の脳はまたグルグルと回り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2035z/>

まじっく

2011年12月8日23時49分発行